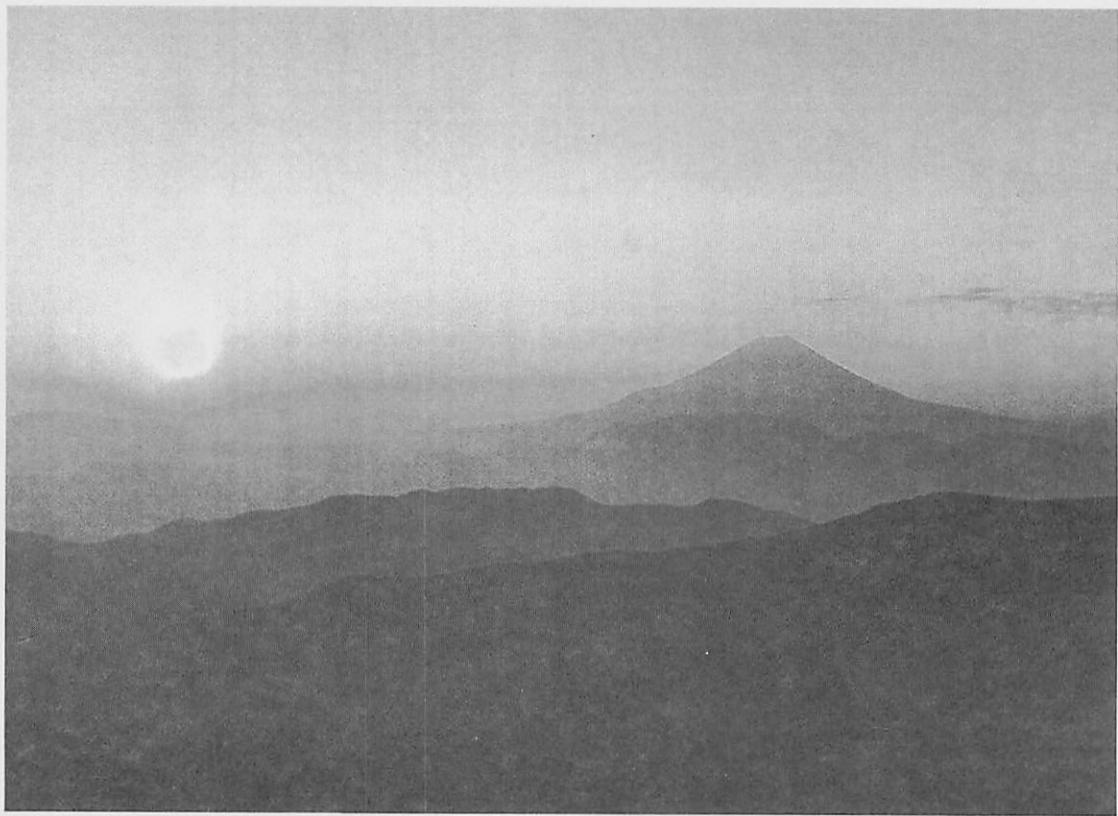


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V58,59号

2005年7~12月



ACC-J茨城

ヤッホーの語源

先日、何気無くテレビを見ていたら興味あることをやっていたので身を乗り出して見入ってしまった。それは、山で叫ぶ「ヤッホー」の語源はどこからきているのかというもの。答えはドイツ語の「ヨッホー」が語源であるという説がもっとも強いとのことだった。ドイツ人が山で人に声をかけるとき「ヨッホー」と叫ぶらしく、「おーい」という意味だそうだ。その他

1、アルプスの牧童が牛を追うときの掛け声「ユッヘ」

2、ヨーデルの掛け声「イヨーッホッホッホッ」

3、あるドイツ人宣教師が山頂からの素晴らしい眺めに思わず叫んだ「ヤハウエ」

などの説もあるとか。

徳島県の某町では山びこのプロがいるというのだから驚きである。この町では2級山彦認定士試験合格登録証なるものを発行していて、認定士も13名いるそうである(2級があるのだからおそらく1級もあるのだろうと思う)。試験は実技とペーパーテストがあるとのこと。どんな問題が出るのか興味あるところだ。さらに「ヤッホー」を叫ぶときの正しい姿勢があるらしい。「ヤッホー」の基本姿勢は

1、左足を一步前に出す

2、左手は腰、右手は口元にあてる。
3、上半身を45度の角度で振りながら(バッティングの要領で)「ヤッホー」と叫ぶ。

諸君、おわかりいただけましたか?ぜひ今度試してみてはいかがだろうか。

さて、クラブによっては仲間にコールするとき決まった呼び方がある会も昔は結構あった。「ドーシ」「ホーホッホ」「ローマン」などなどである。クラブの名前から作ったコールサインが多かつたようだ。どういうときにコールするかというと、それも決まりはない。「俺たちは順調に登っているぞ」とか「お前たちも頑張れよ」とか「俺たちはここにいるから待っていろよ(待っているぞ)」など、その場面によってお互いその意味を解釈し合うのである。実は当クラブでもあることはあった。特に決めたわけではないが「ヨーホッ」と語尾を上げてコールしていた。別にこれの語源はない。沢登りをしている会で現在でも活発に行われている集中登山は、昔は岩登りのクラブでも行われていた。当会でもよくおこなったものだ。最近は複数パーティがルートを変えて同時に同じ岩場に取り付くことがなくなってしまったので、コールする機会もないのが現状だ。自分の登攀に神経を集中し、純粹に岩登りを楽しんでいるのだから、そんな余計なこ

とに大声を出すのは嫌いだという人もいるだろう。でも私はそういうことが好きだったし今でも変わらない。みんなでワイワイガヤガヤやりながら登るのが好きである。またコールを掛け合いながら賑やかに登れる時代がくることを待っている今日この頃である。

前編集長が急遽転勤になり、私が編集員を担当することになった。編集長はW氏であるが、一人では忙しすぎるので私

は応援する立場である。あくまでも一時のピンチヒッターと考えているので、近々きちんとした編集員を選任したい。巻頭言も初代編集長であった私がいまさら書くこともおこがましいので、次号からはその度に選任した人に書いてもらおうと考えている。みなさまのご協力をお願いしたい。

(M)



《目次》

2005年秋・冬号 7月～12月 ACCJ・茨城

卷頭言—ヤッホーの語源—	1
集会報告	4
山行報告	5
日高 サッシビチャリ川本流	7
黒谷川 西実入沢	11
清津川 釜川右俣（千倉谷）	13
那須 井戸沢～流石山～峠沢	14
安達太良山 杉田川	16
水根沢	17
奥多摩 大雲取谷	18
奥多摩 カロー川谷	19
忠別川 クワウンナイ川	20
知床 海別岳	22
コラム	23
魚野川 渋沢	24
三ツ峠	25
安達太良 湯川	27
片品川 センノ沢	28
南ア縦走 荒川三山～赤石岳	30
西沢渓谷 胡桃谷	32
北ア縦走 西穂～槍ヶ岳	33
役内川三滝沢	35
錫杖岳 左方カンテ	37
難台山	39
富士山	40
那須 朝日岳	41
友好山岳団体の月報・会報・その他	42
編集後記	46

* 表紙—朝焼けの富士 (Photo by Suzuki)

集会報告

(於：ガスト土浦店)

《末日》

【7月】

- 7月 6 日：本団、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、木南、正木
7月20日：木村、吉田、渡辺、菊地、木南、正木、西川

【8月】

- 8月 3 日：本団、木村、菊地、吉田、渡辺、木南、松田、坂田、正木
8月17日：本団、木村、吉田、坂田、菊地、渡辺、正木
8月31日：本団、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田

【9月】

- 9月14日：本団、木村、菊地、坂田、渡辺、正木、鈴木
9月28日：記録もれ

【10月】

- 10月 2 日：本団、木村、吉田、渡辺、坂田、木南、西川、鈴木
10月26日：木村、本団、菊地、笹平、吉田、坂田、木南、正木、鯉河

【11月】

- 11月 9 日：本団、木村、菊地、吉田、松田、木南、西川、坂田、
渡辺、笹平
11月24日：本団、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、正木、西川、鈴木、笹平

【12月】

- 12月 7 日：本団、木村、菊地、坂田、松田、木南、鈴木
12月21日：本団、菊地、吉田、西川、坂田、鯉河、渡辺、鈴木、木南

山行報告

(2005年 7月～12月)

【7月】

7月 2～6日	日高 サッシビチャリ川本流	笹平
7月 5～6日	黒谷川 西実入沢	坂田
7月 9日	三ツ峠	渡辺、坂田、松田、正木
7月15～17日	清津川 釜川右俣（千倉谷）	松田、他2名
7月 24日	那須 井戸沢～流石山～峠沢	西川
7月 30日	安達太良山 杉田川	西川、他1名
7月 31日	水根沢	渡辺、木南、正木

【8月】

8月 6日	奥多摩 大雲取谷	坂田、正木、渡辺、他1名
8月 21日	奥多摩 カロ一川谷	本団、吉田、木南
8月24～25日	大雪 クワウンナイ川	渡辺、名雪
8月 29日	知床 海別岳	笹平、名雪

【9月】

9月 3～4日	魚野川 渋沢	松田、他1名
9月 4日	奥多摩 小川谷滝上沢	渡辺、正木
9月 10日	三ツ峠 安達太良 湯川	渡辺、坂田、鈴木、他1名 木村、他3名
9月 13日	片品川 センノ沢	坂田
9月17～19日	南ア縦走 荒川三山～赤石岳	鈴木
9月18～19日	中ア 越百沢	松田、他3名
9月18～21日	北ア縦走 西穂～槍ヶ岳	渡辺、他1名
9月 23日	西沢渓谷 胡桃谷	本団、木南
9月28～30日	秋田 役内川三滝沢	坂田

【10月】

- 10月8~10日 錫杖岳 左方カンテ 本図、渡辺
10月 23日 難台山 フリー 吉田、本図、木南、渡辺,
他1名

【11月】

- 11月3日 古賀志山 松田、西川、鈴木
11月27日 救助訓練 笹平、坂田、鈴木、西川
菊地、木村、本図、渡辺
吉田、ACCJ-東京3名、
水戸葵山岳会

【12月】

- 12月3~4日 富士山 松田、他2名
12月 3日 那須 朝日岳 坂田



日高 サッシビチャリ沢本流～

1839峰～ペテガリ岳

2005. 7.2～6

パーティ 笹平 孝

1839峰を知ったのは、2年前の秋に日高のカムエクへ行った時だった。札内ヒュッテで出会った地元山岳会の人達が1839峰へ登る予定でいたので、その山の事をいろいろと教えてもらった。1839峰（イツパサンキューホウ）は標高から付けられた山名で、現在の標高は1842メートルに訂正されている。

フェリーで7月1日の昼過ぎに苫小牧港に着き、夕方には神威山荘に到着した。本来ならペテガリ山荘へ行ければ良いのだが、静内の林道は土砂崩れのため、現在通行止めになっている。別ルートの三石経由の林道は、電話で確認したら一般者の通行は無理。しかし裏情報だと、関係者に知り合いがいれば、合い鍵を使って車でペテガリ山荘へ行ける。（※定期的に鍵の番号が変わる）

7月2日

神威山荘から林道を少し戻り、沢沿いの林道を行く。途中から道が無くなると、沢登りになる。滑りやすい急斜面を登り反対側の沢筋へ下ると、ペテガリ山荘へ続く林道に出た。この林道歩きが結構長い。ペテガリ山荘は2階建て作りの立派な

小屋で、中には大きな薪ストーブがある。ここに食料やビールをデポして出発。

サッシビチャリ沢には林道があり、少し歩くと川原へ降りられた。ここでまだ新しい熊の足跡を発見する。沢を歩くとすぐに函の連続が始まり、入渓後10分で早くも腰まで水に浸かっていた。しかたなく函の入り口で断念し、林道の所まで戻る。今回、サッシビチャリ沢の記録とか逆行図が手に入らず、地形図しか持つて来ないので、この沢の情報は全く分からなかった。

林道から樹林帯の中を進み、函の連続を大きく巻いて沢に降りた。沢はすぐにでも函が現れそうな感じが続き、不安になりながら進むと、やはり函が現れた。右岸を登るとテープを見つけたので一安心する。あまり人が入っていない沢なのかマーキングが少なく、この沢でテープを見たのはこれだけだった。滝を過ぎると谷は開けて明るい沢に変わる。やがてペテガリ岳へ続く沢との二俣を過ぎ、沢の半分の距離を歩いた事になるが、なかなか高度は上がらない。そして左側から1839峰へ続く沢が現れ、水量もだいぶ減ってくる。

まもなく雪渓が現れ始め、薄い所もあるので慎重に歩く。川幅が狭まったゴルジュが現れ、その手前には悪い雪渓があり行き詰った。左岸の草付を偵察しながら登り、ゴルジュを高巻いて沢に降りた。ここを過ぎた所がヤオロマップ岳から流れる沢の二俣になり、今日のキャンプ地とした。川原の石を整地してツェルトを張り、焚き火で温まる。釣りをやつたが何も釣れなかつた。

7月3日

この先から雪渓がさらに多くなり、沢を埋め尽くしている所もたまに出てくる。沢はゴルジュ状に変わり、高巻きをしたりへつりをしたりでなかなか進まない。ゴルジュ状を過ぎると沢は開け、ナメ滝が続き高度を上げ始める。この先は沢が雪渓で埋まっている所が続き歩_ 'abやすくなつた。雪渓を登り詰めると、しばらくは急なガレ沢が続く。山の斜面には崩れた跡があちこちにあり、大雨で山が崩れ、沢に岩が堆積した事がよく分かる。

やがて急なナメ滝に突き当たり、灌木を頼りに木登りで登る。稜線付近まで急なナメ滝の連続で、ここの谷の深さを体感しながら登って行く。ナメ滝の登りは2時間近く続き、途中で水を7リットル汲んだ。水が枯れると稜線はすぐ上に見える。1599峰（1600m）にはテントスペースがあり、ここに沢装備や水4リットルをデボする。

1599峰からヤオロマップ岳へ向けて出

発。登山道はあるがハイマツに覆われていてとても疲れる道だ。途中、登山道が消えている所もある。ヤオロマップ岳の登りになると、やっと歩き易い登山道になった。体力的にも精神的にも疲れ果てた1599峰—ヤオロマップ間の、4時間もかかった長いヤブ道歩きを、帰りにまた歩くと思うとゾッとする。

ヤオロマップ岳にはテントスペースが数ヶ所あり、頂上に近い岩陰にツェルトを張った。落ち着くと右足にダニが2匹食らい付いていたので引き剥がす。薄暗くなつた頃に足音が聞こえ始め、とうとう出たかなと思っていたら単独の人がやつて來た。ペテガリ岳東尾根経由で登り、今日はルベツネ山から來たそうだ。

7月4日

朝から天気が良く快晴だ。最低限の荷物を持ち、1839峰へ向かう。少し進んだ所では、稜線上に雪渓が少し残っていた。北海道は例年よりも1ヶ月くらい雪解けが遅れているらしい。登山道はハイマツや熊笹に覆われ歩き難い。1839峰までは大きくアップダウンを繰り返すので、見た目よりも歩く距離が長い。足元にはハイマツの幹が多く疲れる。最後は急斜面の登りになり岩場も出てくるので、ハイマツを掘んで慎重に行く。1839峰の頂上は赤テープがあるだけで何も無いが、展望は最高にいい。コイカクからカムエクまでの稜線が見渡せ、奥の方には幌尻岳が見えた。

ヤオロマップ岳に戻りツェルトの撤収を始める。昨日の単独の人はここで写真を撮っていて、これから札内ヒュッテに下るそうだ。しばらく山の話で盛り上がる。下山したら中札内で会うことを約束し、ペテガリ岳へ向けて出発した。

1599峰までの長いヤブ道で、昨日落としたストックを探しながら行くと、奇跡的に発見する事ができた。1599峰でデポした荷物をザックに押し込みルベツネ山を目指す。徐々に高度を下げ、ハイマツ帯から灌木帯に変わる。硬い枝がザックに引っ掛かり苦労する。この辺りの稜線はアップダウンが多く、ピークを登っては下りを繰り返していると足元にクロユリが咲いていて、疲れ果てた体を癒してくれた。

とにかくルベツネ山まではとても長く感じた。頂上のテン場は風が強いので諦め、さらに進む事にする。登山道はハイマツ帯に覆われ、相変わらず歩き難い。なんだかんだで、ペテガリCカールのコルまで来てしまう。水は十分にあるので、稜線上で横になれるスペースを探！それに少し先まで見に行ったが、岩が多く良い場所が無かった。仕方なくCカールに降りて雪渓のわきにツェルトを張る。深夜から小雨が降り始め、風も強くなつた。

7月5日

冷たい雨と風の中、ツェルトを撤収するとすぐに手の感覚が無くなつて痛くなる。稜線に登り返し、コルから10分くら

いの所で一ヶ所テントスペースがあった。雨は止んだが、辺りはガスで視界が悪く風が強い。やがて稜線上にペテガリ岳頂上の標識が見えた。長かった縦走も最終目的地のペテガリ岳に到着し、ハイマツに覆われ歩き難かつた道もこれで終る。後は下るだけだと思うと心の底から嬉しかった。

頂上から下り道がしばらく続き一気に高度を下げると、山頂付近の雲から抜け出し、周りの山が見渡せるようになった。コルまで降りると、今度は尾根を登り始める。途中、300名山をやってる単独の人が登って来た。現在299登っていて、ペテガリ岳で全て登り終わるそうだ。

なかなか高度を下げないまま、しばらくの間はアップダウンを繰り返すので、下山しているとはまったく思えない登山道だ。歩いても歩いても辿り着かないといった感覚になる。やがて急な下り道になり、沢沿いを進むとペテガリ山荘に到着した。

ペテガリ山荘の中にある大きな薪ストーブに火を点け、荷物を広げて乾かす。疲れていたがまだ時間が早いので、近くの川へ魚を釣りに出かける。思っていたほど魚は多くないようだ。ヤマメが釣れたので今日のおかずにしよう。

小屋へ戻るといつの間にか300名山の人が下山していた。この人は神威山荘からペテガリ岳そして神威山荘を日帰りする予定だったが、今日はペテガリ山荘に泊まるそうだ。今日のコースタイムを聞

くと、300名山をすべて登っただけあってそのスピードは半端じゃなく早い。夕方、お祝いにビールをプレゼントして、お互いの完登と一緒に祝杯した。やがて夜から雨が降り始める。

7月6日

朝起きると強い雨が降っていて、神威山荘までの沢登りよりも神威山荘からの林道が通行止めになつてないか心配だ。やがて雨が小振りになつたのでペテガリ山荘を出発した。沢の増水も無く、神威山荘から來た二人組みと会つたので、林道の通行止めは無いようだ。

途中でいいサイズのアメマスを3匹釣り上げ、神威山荘に戻つた。まだ早い時間だけれど雨も降つてゐるから、今日は小屋に泊まる事にしてのんびりする。小屋の中にある薪ストーブで魚を焼き、刺身

をつまみにビールを飲んだ。特に刺身はトロのような感じで、なまらうまかった。

7月2日：神威山荘(6:00) — ペテガリ山荘(9:20～10:40) — サッシビチャリ沢

(11:15) — 上部二俣(16:20)

7月3日：上部二俣(5:30) — 1599峰(10:20～11:10) — ヤオロマップ岳(15:20)

7月4日：1839峰ピストン(4:20～8:40) — ヤオロマップ岳(10:30) — 1599峰(14:00) — ルベツネ山(18:00) — ペテガリCカール(19:20)

7月5日：ペテガリCカール(8:00) — ペテガリ岳(10:00) — ペテガリ山荘(14:30)

7月6日：ペテガリ山荘(7:20) — 神威山荘(10:30)

(笹平 記)



サッシビチャリ川

黒谷川 西実入沢

2005.7.5~6

パーティ 坂田英希

=すまいる=

森はいいね。春は萌え、夏は蝉時雨。
風に唄い、雨の零は葉を叩き静かに万雷
の拍手となる。
渓もいいね。ほどよく響き、露はもはや
水晶のごとき。
水面に映るはとっておきのイイ顔。すま
いるすまいる。

おいしい沢旅のつくりかた①

蒼天の吉日を逃すべからず。それから”
すまいる”を忘れずに。

=火の傍=

平凡な流れ。どこまで行っても何てこと
ない流れが続く。
この平凡さが実にイイ。たまにはドキド
キさせられたりハラハラしてもイイン
じやないかと思ったりするけど平凡な
流れが平然と続くのです。

苦悩を感じさせない気概がいいね。到底
及びもつかないなあ。

渓の恵みをほんの少しだけ分けて頂き、
一方的に居候。こんなわがままホントは
叶いっこないんだろうけどね。

それもこれもリリスに感謝。

おいしい沢旅のつくりかた②

ときに自分を見つめて苦笑い。火の傍、
着に囲まれ酩酊するがよし。

=晴天の霹靂=

明けて本日もすまいるすまいる。どうし
たって止まらないね。止められないね。
それには予感があった。

「決めた。あそこに行く。どうしても行
く」リリスはそうしてその場所を選んだ。
藪に浮かぶ湿原。それはまさに晴天の霹
靂。憧れで済むはずはなかった。

=ひとつまみ=

ひと汗かく頃いくつか支流が合わさっ
てくる。そのいずれかがそこへと導いて
くれるだろう。
とはいえ藪こぎの覚悟さえあれば怖い
ものはない。

空梅雨の晴れ間、日差しはもはや夏以上。
一気に突き上げる支流はまるで空に続
くようだ。

急登が済めば特有の猛烈なヤブ。と思っ
ていたが、まあそれほどでもなかった。
ヤブ3級。

おいしい沢旅のつくりかた③
ほんのひとつまみ、蘿こぎを入れてみる。
決して入れすぎてはいけません。

=モウセンゴケ=

先人はこの場所を「モウセンゴケの湿原」と記した。
池塘の周りに小さな小さな食虫植物が
点在していた。それがこの名の由来であ
ろう。
それに習ってそう記す。

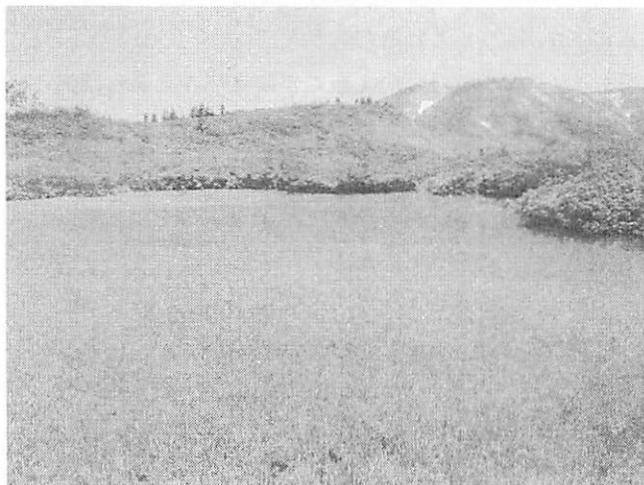
そこはせめてもの救いだった。今の坂田
にはこれが精一杯。
ほんのわずかなときだけ、ほんのささ
やかなものだけ、蘿にポッカリと浮か
ぶ瓢箪型の湿原で心地よい風に吹かれ
た。

=手作りレシピ=
莊厳な森、きらめく渓、やさしい焚、樂
しい漁と採。めざす先には蘿に原。
せめて今だけ、ここだけでも思いのま
まに。群青の空に微笑めば渓に濡れるも
心地いい。風に吹かれて想い耽れば自然
と道は見えてくる。
そんなときが何ものにも代え難い。

手作りレシピに欠かせないのは最後の
ひと工夫。それはね、それぞれのかくし
味。

さあ、おいしい沢旅のできあがり。
食べ頃は何といつても作りたて。おいし
いうちに召し上がれ。

(坂田 記)



西実入をつめて出た『モウセンゴケの湿原』

清津川釜川右俣(千倉谷)

2005. 7.15~17

パーティ 松田、他 2 名

苗場山の裏手にあたる津南の沢。

苗場一帯のなだらかな高原状の稜線から下る川ながら、岩盤を穿って流れるため、三段釜付近で巨大なスラブを発達させている。

三段釜は、コンクリートの側溝を思わせるような流れに立ちふさがる立派な滝で、1段めは左岸のカンテ直上、2段目は、右岸の草付きがちな壁をトレースした。
(いずれもザイルを張った。)

三段釜の上では、2~3の滝で岩がちな樹林を巻く大高巻きを2回ほど行った。
夕立に会い、焚き木が濡れたため、焚き火を断念。やむなく釣りをしてみるとイワナが1匹釣れた。

17日は、清水谷出合手前で、同行者が足を捻挫したため、以後ペースダウン。清水谷出合の手前の滝は、左岸から、コンディションの悪い泥壁を2ピッチで上に抜けた。(ここは右岸側がルートらしい。)

この上で、めっきり源流の雰囲気となり、途中多少の泳ぎもあるが概して快適。

林道横断点で、エスケープとなった。

ここからは林道ゲートまで高原のなだらかな林道が続き、下山は快適だった。

15日 谷和原23:15~(新宿)~関越道~3:30塩沢石打 I.C. (仮眠)

16日 I.C. 6:00~国道355号~グリーンピア津南~林道ゲート7:55~入渓点(取水口)8:10~9:30右俣分岐(千倉沢)~

13:00三ツ釜の大滝14:02、16:45C.S.

17日 C.S. 7:30、10:15清水谷出合手前の滝(左岸泥壁)12:11~13:00ブナ林のある川原、15:35林道横断地点(橋)16:15~林道ゲート18:33

(松田 記)

那須 井戸沢～流石山～峠沢

2005. 7.24

パーティ 西川 潮

早朝、マイカーにてつくばを出発する。季節によっては三斗小屋宿跡まで車を入れるらしいが、橋手前にかけられたチェーンにはしっかりと鍵がかけられていた。車止めから40分ほど歩いて井戸沢出会いに到着。ここに下山用のサンダルをデボし、入渓する。

最初に出てくる15m滝には、初心者を含むパーティーが左岸に取り付いていた。しばらく様子を伺うが、遅々として進まない。そのうちしづれを切らして右岸のブッシュを高巻く。しかし、高巻きは結構ブッシュが濃く、こんなことなら順番待ちをすればよかったと豪く後悔をした。

滝の上で先ほどのパーティーを追い抜かし、後は快調に飛ばす。一人なので気が楽だ。おまけに滝はどれも快適に登れ、嫌らしいところはない。

10mナメ滝に着くと、初心者を大勢含む大パーティーが右岸に取り付いていた。ここでも順番待ちをするが、すぐに退屈になり、左岸を直登し始める。このまま直登できるかと思いきや、落ち口へのシャワークライミングの乗越しが悪い。ここは単独なので無理をせず、途中までクライムダウンした後トラバースをして、右岸を上がった。



源頭は藪こぎがほとんどなく、ひょっこり登山道に出た。頂稜には金色に輝くニッコウキスゲのお花畠が広がっていて美しい。他にも、シナノキンバイ、キンコウカ、シモツケ、ハクサンフウロ、ミネウスユキソウ、ミヤマオダマキ、モミジカラマツ、ウサギギク、ベニサラサドウダン、ウラジロヨウラクなど、赤、青、黄、白の色とりどりの花が咲き誇り、数、種類ともに枚挙に遑がない。このお花畠の存在は、沢登りをさらに楽しいものにしてくれた。

流石山頂上付近ではたくさんのハイカーがお弁当を広げていた。皆このお花畠が目当てのようだ。私もゆっくりと昼をとりながら、心ゆくまでこの花園を目に焼き付けることができた。

大峠からしばらく登山道を下り、適当なところで峠沢に入る。この沢は滝と言えるものがないため、特筆するものはないが、オオバギボウシなど井戸沢では見られなかつた花が咲いていた。

井戸沢出会いに戻り、デポを回収しようとしたところ、あるはずのところからサンダルが忽然と姿を消しているではないか。目立つところにくくりつけておけばデポしたことが分かると思ったのだが、かえって持つていかれる結果となってしまった。まさか人のサンダルを持

っていく人がいるとは。昨日買ったばかりのサンダルだっただけにショックが大きい。近くで野良仕事をしていたお爺さんにサンダルを見かけなかつたかどうか尋ねたところ、「そりや、あんたが悪い」と言われてしまった。お爺さんはここで巨大な石像をいくつも盗まれたそうである。

せっかくここまで気分がよかつたのに…少しブルーな気分で帰路についた。

林道車止め 9:00=三斗小屋宿跡 9:40=
流石山 = 12:00～12:30 = 林道車止め
15:30

(西川 記)



安達太良山 杉田川

2005. 7.30

パーティ 西川 潮、他 1名

朝 6 時過ぎ頃つくばを出て高速に乗ったが、事故渋滞に巻き込まれ、やむなく途中から下道を行った。予定よりだいぶ遅く入山口に到着する。広い駐車場には私たちの他に、ハイキングに来た中年のカップルしかいない。パートナーは、沢登りは今回が初めてである。

「あれが安達太良山、あの光るのが阿武隈川」などと、いささか怪しい記憶を頼りに諳んじてみる。ここは森が美しい。川は滔々と流れ、水が透き通っている。天気もよく、心が弾む。入溪点付近では、ガクアジサイがコバルトブルーの花を咲かせていた。

遠藤ヶ滝を左岸から巻き、しばらく茶色い岩盤に透明なカーテンを引いたような川床を歩くと、5m前後から15mくらいまでの滝が適度な間隔で出て来る。全部で5回くらいだろうか、ザイルを出して後続のパートナーを安全確保した。難しいところは一つもない。ザイルも30mの補助ザイル一本で十分足りた。

美しい釜を擁する 1050m 二股を右に取り、しばらく進むと、沢の規模は小さくなり、やがてゴーロ帶となる。最後の2段 10mの滝を、少しばかり水を浴びな

がら乗越すと、やがて踏み跡の合流点に出た。この合流点は赤布がたくさんついていて見逃しようがない。ここで一休みした後、踏み跡を辿る。この踏み跡は途中から不明瞭となるが、そんなにひどい藪こぎにはならなかった。日が傾き始めた頃、羽化するために出てきたセミの幼虫に遭遇する。7年も地中にいて今何を思う？ 哲学者のような顔つきのセミを横目に下山を急いだ。

仙女平からは安達太良温泉に向けて登山道を下る。パートナーは、「ワラジをつけていると泥道の下りでも滑らない」と歓喜している。彼女は通常、下山路で何度か尻餅をついてベソをかくからである。安達太良温泉が近くになると、満開のヤマユリが私たちを迎えてくれた。

駐車場 10:00 = 遠藤ヶ滝 10:30 = 1050m
二股 14:00 = 踏み跡合流点 14:50 = 仙女
平 15:40 = 安達太良温泉 17:45

(西川 記)

女だけの水根沢谷

2005. 7.31

パーティ 渡辺聰子、正木博美、木南真紀子

今回のコンセプトは女性だけの沢登り。南流山の木南宅に集合後、奥多摩に向かう。たしかどこか違う沢に登る予定だったが、台風7号の通過後すぐだったためにそこに行く道路が土砂崩れのために通行止め、通行止めぎりぎりの広場でその夜は宿泊。次の朝は快晴。このまま何もせず帰るのは悔しいのでいろんな案ができる。雲取山に登るとか、でもでも地図も足らず、気合いも足らず。

結局、正木さんが初めてということで水根沢に決定。

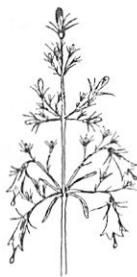
たらたらと移動した後に準備して、今回は女性の陣の親睦と渡辺さんのリベンジをかけて出発。

ところが水量がめちゃめちゃ激しくて、前回に来たときに較べたら難しさ4割増。水量次第でここまで変わらのかと思いました。

おかげでコース自体は新鮮に楽しめました。ラストの半円の滝、3人とも何度もチャレンジしても水の激しさに負けてトラバース。

それでも自分たちで進めた充実感があり、チタケもゲットし満足でした。

(木南 記)



奥多摩 大雲取谷

2005. 8.6

パーティ 渡辺聰子、正木博美、坂田英希、他 1名

夏の盛りに冷たい一本。

たまらず「くう～」つといっちゃんよね。

すべからく、爽快に、快適に、痛快に。

木陰に涼めばゆらりと時は過ぎる。

はあ～、日本の夏。奥多摩の大雲取谷。

でこぼこ林道をガッ一と行って、ハタ
と止まれば登山口。ころころ下って橋の
手前で入渓する。

でもって、たしか滝があった筈だ。大き
な釜の向こうにゴォーと小魚止ノ滝。こ
れは右からなんとなく巻く。

「たしか～」というには理由がある。以
前、坂田はこの谷に入渓したことがあつ
た。

その時の、はかなくも切なく最後にシア
ワセな気分にさせてくれる物語は、何か
の機会に紹介させていただくとする。
もともと、ここに明るいイメージはなく、
深山幽谷の趣が特徴で長沢谷を見送つ
てからは、なおのこと深森の一縷といつ
た雰囲気がある。

その中にあって、流れのキラメキがずい
ぶんくすんでいるとは感じていた。

「そのとき！隊員は見た！なんと！土

砂崩れで谷が埋まっているではない
か！」

なので、とりあえず登る。少々興ざめな
所である。

「そして、そのあと更なるオドロキの事
態が隊を襲うことになるのだ！」
土砂を登ると山肌ごそり大崩。爽快な
気にすらなる。

「なな、なんと！その先は土砂に堰き止
められた流れが湖となっているではな
いか！」

なので巻く。沢床に下りるのに 5 m 懸垂
下降。
予想していなかった事態にロープを持
ってきてよかったなという安堵。

あとは幽谷の雰囲気を楽しみつつ、それ
ぞれが前後をしながら滝や釜や滝やで
踏破していくのである。
と、思ったのもつかの間。釣師出現。
この時点で坂田が先頭。コレは私がこの
難局を何とかせねばなるまい。

沢ヤ：「コンニチハ～」

(どうも沢ヤです)

釣師：「・・・・。」

(嫌なやつらが来ちゃったよ！)

沢ヤ：「どこまで釣りあがるんですか
あ？」

(釣りたって、その風体ではこ
の辺の林道に近いところだけデショ。)
釣師：「ずっと上まで。最後まで行くよ。」

(インヤ、この先ズーッと俺の釣
りのために静かに歩け。この先ズーッと
だぞ。)

沢ヤ：「じゃ、できるだけ静かに行きま
すんでえ～。お先きしますう～」

(ンナわけねーだろ。そういう態
度のヤツにや俺らキビシーよ。)

釣師：「静かに頼むよ」

(ホントに静かに行けよ。解って
んのんか？)

沢ヤ：「解りましたあ～」

(まあ、シバラクはな。先に行っ

ちまえば知ったことかよ！)

あとは幽谷の雰囲気を楽しみつつ、それ
ぞれが前後をしながら滝や釜や滝やで
踏破していくのである。

まあ、前半と変わった事をいうならば、
そこからは敢えて水流を派手に行くこ
とであろうか。

時に腰まで冷水につかり嬌声を上げ、釜
の深さに恐れをなし、魚を見たならガッ
トリング。

せめて、せめても 15 年前ならば。
絵に描いたような青春群像の一日はあ
つという間に過ぎ去るのでした。

光陰矢のごとし。

(坂田 記)

力口一谷

2005. 8.21

パーティ 本図一統、木南真紀子、吉田仁

久しぶりにある意味みなさんリハビ
リ兼で沢に行って参りました。林道の道
路端に車を止めて仮眠です。辺りは暗く
到着時はよく分からなかつたが入渓点
のすぐ上のようです。カロ一橋より下に
下りて行くと出会いですのでアプロー
チは無いです。この沢は小さい滝が適度
に現れ遊行者を楽しませてくれると思
います。カロ一大滝は右の巻き道より上

に出てこれでとりあえずこの沢のハイ
ライトは終わりなので仕事道を使い下
山しました。釣り師がよく入るようですが
が今回は誰にも会わず静かないい沢ハ
イキングができました。帰り際車の近く
でりっぱなタマゴ茸を二本みつけまし
た。なんかロハスな一日を送れた気がし
ました。

(吉田 記)

忠別川 クワウンナイ沢

2005. 8.24~25

パーティ 笹平 孝、名雪博二(東京) ~ACC-J(酒)最強メンバー~

当初笹平(北海道の)恩師とはクワウンナイ沢を一緒に登ろうと約束をして7月の初めに東京を出発した。

平成17年の夏、北海道は好天に恵まれず7月末の計画が3回の延期で、8月23日(火)20:00ごろ、大雪の麓、東川町道の駅にて合流した。

前日まで激しい雨で忠別川の水位も高く、茶色ににごった水が激しく流れていったが、何はともあれ久しぶりの再開と、明日からの山行の無事を祈って大宴会となった。

8月24日(木)：朝早く車で出発、化雲橋を渡った左に大きな駐車場がある、ここから逸る心を抑えつつ、出発だ、何の変化も無い川原歩きが延々と続き化雲沢とクワウンナイ沢との二股を過ぎ少し登りに為った所に魚止めの滝が出てくる出発してから6時間30分もういい加減に川原歩きはうんざりしてくる、しかしまだ昼だ、まついいか？ついで早速テンパリ。

ここまで来ると水量も気になるほどではない、昼を食つて晩の宴会の仕度だ、思いのほか薪は集まり魚は釣り放題関東地方の鱒釣り場より釣れる、半端じや無い、此處で釣れない人は居ない、初日

なのでビールもある、笹平のおかげで焚き火は豪華に夜空を焦がし、ついでに魚までこんがり焼枯し、星も出て酒もうまい、おまけに刺身の大盛りだ。完璧に酔っ払って寝ちまったよ。

8月25日(水)：明日は天気が崩れる予報で、朝6:20発朝一で魚止め滝を越える少し行くと滝の瀬十三丁が現れる。ここがこの沢のハイライト沢幅一杯に水が流れる美しいナメ滝だ、巻機の米子沢より傾斜はゆるい、大雨、増水で事故が起きるのはここだ。

しかし実に長い、延々と続く、このナメを登りながら沢の対岸に見える尾根がどんどん下方に遠くなっていく。

沢を振り返り振り返りしながら登る、と言っても手を使うほどの傾斜ではない、実に長い、これを越えても魚類生息調査は続く、やっとこのナメが終るところで大滝に行く手を阻まれる。

ルートは左壁を実にうまく抜けている、残置シューリング有、この滝を越すと沢はすでに源流の様相を見せ始める。

やがて源頭部の沼地に出る、ここで靴下を洗い、絞る11時10分トムラウシ-大雪の稜線に飛び出す。

昨日も昼にテンパッテ居る、明日の予

報はあまり良く無い、ヨシッ、このまま下山しちまえ、と言うことで進む。

12時30分化雲岳、ここから長い下り、4時間36分下りっぱなしで天人峡登山口5時26分到着、風呂に入り、東川道の駅にてまたまた大宴会、完全に酔っ払っちゃいました！あのナメ滝の規模は今までに経験していません、いっぺんは登ったほうが良いと思います。ザイルは使いませんでした。

この後

8月28日（日）：海別（うなべつ）ドライブイン集合で、恩師と登山道の無い海別岳へ。

沢から頂上を目指しました、日帰りです、此の時も沢の中でバキバキと木をへし折る音。

一寸登ると、今熊が沢からどいたところで、沢のはじの、今まで乾いていた石が熊の走ったため水浸し、足跡くつきり、私は真っ青。でした。

8月31日（水）：恩師におだてられ、（大丈夫もう、名雪さんは熊には慣れた、単独で充分と？）羅臼岳にサシリイ沢から単独で行きました、此の時は笛を吹きっぱなで登って行きましたが、のべつ幕

無しに笛を吹いて、これだけでも疲れてしました。

のぼりで3回バキバキ、バシャバシャ、があり、下りでは岩に張り付いているとてつもなくデカイのを、30メートルほど手前でまともに見てしまい、私はその場に全身凍りついてしまいました、それでかいヤツがゆっくりと去った後もしばらく動けませんでした。

この日一日夕刻まで、とても明るかつたのを覚えています、瞳孔散大、です。これで私の寿命は10年以上ちじんでしまいました、今年私が死んだら、みんな笹平恩師の責任です。以上、ポックリ。

コースタイム

23日 東川道の駅発 4:40-車で移動-化雲沢出合大駐車場発 5:30-二股 10:30-11:00-魚留の滝 12:00 泊 焚き火、刺身、バター焼き、塩焼き、焼枯し、ビール、焼酎、ウイスキー

24日 テン場発 6:20-（途中生息調査3回有り）-稜線 11:10-化雲岳 12:30 発 12:50-天人峡登山口 5:26（下降4:36）-東川道の駅にて大宴会

（名雪 記）

知床 海別岳

2005. 8.29

パーティ 笹平 孝、名雪博二(東京)

知床半島の基部に位置する海別岳は、知床連山の始まりの山になる。通常は積雪期に登るのが一般的だが、夏の場合は登山道は無くヤブ漕ぎと沢登りになる。

4日前のクワウンナイ川へ行った時に名雪さんも海別岳へ行くことになり、斜里の峰浜駐車場で再び合流する。

翌日、車一台で登山口へ向かう。登山口までの道がちょっと複雑で分かりにくいが、7月中旬に海別岳のルートを偵察をしていたので迷わずに行けた。車が数台置ける駐車スペースがあり、ここから先是硫黄鉱山跡に続く旧鉱山道が始まる。

7月の偵察で4の沢まで行った時、なにげなく足元を見たら、物凄い数のダニがズボンを這い上がっていたのには驚いた。今回はダニ対策として、沢用スパッツと雨具の装備で出発する。旧鉱山道はかなり荒れているが、ジムニーとかならもっと先まで行くことが出来そうだ。

1時間程歩くと、道は笹ヤブに覆われ始め木が邪魔になり狭い獸道のような感じになる。しだいに笹ヤブも深くなり、雨具上下を着込んで突っ込んで行く。今の時期ダニは少ないようで、スパッツにたかっているのをたまに見かける程度だった。夏の天気がいい日に雨具でヤブ漕ぎ

をして、暑さ地獄の辛さを始めて知りました。深い笹ヤブが終わると4の沢に着く。ここから5の沢までは少し下り気味に道が続く。

5の沢にはテープがいくつか下がっていいた。ここから5の沢を詰めて海別岳に向かう。沢は細い流れで、特に問題なく歩ける。岩に水しぶきの跡があり、一瞬先行者かと思ったがそんな事は無く、ヒグマの濡れた足跡が続いていた。しばらくすると、フィックスロープの下がっている小さな滝がある。滝を越えると視界が開け稜線が見え始めた。やがて水の流れは無くなり、急なガレ沢の登りになる。頂上直下は、不安定なガレ場になっているので注意が必要だ。ハイマツの稜線に出たら頂上は目の前だった。

海別岳頂上には三角点があり、ここから眺めるオホーツク海と斜里の風景はとても良い。

登山口 (6:10) — 5の沢 (8:30) — 海別岳 (11:30~12:00) — 5の沢 (13:40) — 登山口 (16:20)

(笹平 記)

コラム

先日のクライミングジムでのこと。T会のI君が実験してみたいことがあると言う。なんでもクラブ員が8環で懸垂下降中、片方のロープがすっぽ抜け、転落してケガをしたのだそうだ。話を聞いて私は即座に「そんなことは考えられない」と答えた。しかし実験してみると驚くべき結果を得た。

トップロープをセットしようとした状態を想像していただきたい。支点はカラビナなどの滑りやすい物。手袋などをつけており手掌の感覚があまり得られない。そして、支点で折り返したロープ片方に何らかの原因でテンションがかかっている状態、ロープの末端が結ばれていない、この状態で注意を払わずただ漠然と懸垂すると、テンションがかかっていない片方だけが8環からすっぽ抜ける現象が起きるのである。では末端を結べばこの危険を解消できるかというとそうとも言えない。支点にシューリングを使用しているときに、この現象が起きればシューリングはいとも簡単に切れ、大事故になる可能性がある。常に気を緩めず注意していることが命を存える唯一の方法だろう。

(M)

魚野沢 渋沢

2005. 9.3~4

パーティ 松田 尚、他1名

野反湖の1本下流で魚野川本流に注ぐ。

野反湖は稜線間近にある人工の天井湖なので、入渓点の魚野川本流川床へは標高差約1,000mを下る。（約3時間のアプローチ）

魚野川本流と同じく、流程を通じて高度差があまり無いので、前半は大きな滝も無く、川を遡る旅といった感じの沢。2日めの二俣以降は、大滝など豪快な滝も出現し、滝なども美しく、沢登りらしい変化に富んだ沢となる。

最初のゴルジュは、泳ぎを交えた廊下となるが、水量と、水温の低さから、軽い低体温症に陥ったため途中から高巻いて抜けた。

2日めの大滝は、スケールが大きい。左岸のレンゼ状～尾根越えの大高巻きで落ち口のすぐ上に抜けた。

稜線に出際、根曲がり竹の藪こぎが30分ほど。

水は澄んでいるが、渋沢という名前のとおり、若干鉄分を含んだような味がするような気がした。林道などが全く無いエリアを流れる沢だけに、原始の自然が残っており、森のなかをトレックするような感じのよい沢だった。

2日 (長野新幹線)～軽井沢～(車)～野反湖(仮眠)

3日 野反湖 (1,550m) 7:00、(下降)、10:30魚野川渋沢出合(1,000m)、最初のゴルジュ上14:00～16:00C.S. (1250m付近の川原)

4日 C.S. 7:30、9:00二俣、11:00

(松田 記)

三ツ峠屏風岩

2005. 9.10

パーティ 渡辺聰子、坂田英希、鈴木大輔、他 1 名

9月にACC-Jに入会して初めての山行は、三つ峠でマルチピッチのトレーニングをするということになった。このゲレンデには都岳連の岩登り講習会も含め、何度か訪れている。今日は天気もよく、風も穏やかでクライミングには最適な環境と言えた。前日の夜、谷田部を出発し、午後11時過ぎには駐車場に着いていた。ささやかに杯を傾けた後、僕と坂田さんは車中泊、渡辺さんたちはテント泊となった。星空がよく見えて期待が持てたが、その通りとなった。

初めは右フェイスのほうへ行って、アップすることにした。下部のほうは楽なのだが、第一バンドから上部のあたりは岩の形状が似たような感じで、残置ハーケンも見つけづらく、どこがどのルートかよくわからない。大体、ここがこのルートだろうというあいまいな記憶で登るのだが、ルートが正しいのかどうかわからない不安感がクライミングにも表れてしまって、どうもすんなりと登れる気がしない。一応持ってきたキャメロット2/3セットを駆使しながら、どうにか上部へ這い上がっていく感じだった。当然フリーへのこだわりなど吹き飛んでいる。マルチピッチはひさびさだからと自分に言い訳もしたりする。坂田さんは

セカンドのビレイにATCを使っていて、さらにそのあとトップのビレイにも支点ビレイをするらしい。これにはちょっと驚いてしまった。それって、菊池敏之氏が「最新クライミング技術」の中で間違いとしている3つのうちの2つに該当しているではないか（ちなみに、あとひとつは下方向へのボディビレイである）。やっぱりレベルソがいいですよとお勧めしたら、最近レベルソ派になつたようで安心した。やはり自分と同じやり方でビレイされるのが、一番安心できるものだ。

その後、左フェイスへ移り、亀ルートを登ることにした。1ピッチ目は簡単だったが、2ピッチ目のバンドから立ち木テラスへ登る部分は、いつもそうなのだが、流水の通り道になっていて、今日もかなりの流量が見られた。流水というよりちいさな滝といった風情である。水は冷たく、足も滑るので、かなりの恐怖感だ。キャメロットが効く場所がいくつかあって、支点を増やすことができ、精神的に助けられた。立ち木テラスからは、八寸トラバースまでひたすら斜上していく。このへんは技術的に困難なことはなく、富士山を眺めながら快適なクライミングだ。トラバース部分はぱっと見て、

ああこれのことか、というよりこれを渡るんかいと心の中でつっこみを入れたくなるほどわかりやすいものだった。八寸は約24センチにあたるが、とてもそんな幅があるようには見えない。中間にスリングがたれていて、そこから支点が取れるし、下はすっぽり切れ落ちているから、ビレイさえ失敗しなければひどいことにならないだろうとは思う。つかんだ感じのしないホールド、つま先だけのフットホールドと高度感で緊張しながらも、体を横にずらしていった。そこを抜けると次第に草木が生い茂るようになり、上部のテラスまでいったが、ほこりっぽく浮石だらけになっていた。行き過ぎているんじゃないかという意見もあって、懸垂ポイントもあるので、ここで終わろうということになった。一気に懸垂下降して、基部まで戻る。その後、右フェイスの観音ルートあたりをさわ

ってみるも、かなり疲労がきていて、登っては休み、登っては休みといった感じだった。小笠原さんがくたびれたということで、僕がリードで登り、後続の二人はダブルロープを一本ずつ使いセカンドで登った。二人セカンドビレイはやったことがなかったので、ロープワークにやや戸惑ったが、無事2ピッチ登り、懸垂で降りて、今日のクライミングは終わりということになった。今回初めて山岳会のクライミングに参加させてもらったわけだが、自分の技術と装備で十分やっていけそうだという感触をつかみ、うれしかった。この調子で、フリークライミングに加え本チャンの岩場にもトライしていきたいものである。

(鈴木 記)



安達太良 湯川

2005. 9.10

パーティ 木村 一、他 3 名

今回は私が夕方の 6 時に用事があるので、つくば市に 5 時半までに帰ってこれる場所という事で簡単な安達太良湯川に決定した。安達太良の杉田川は同じメンバーに木南さんを加えてメンバーで昨年夏に遡行していますが、ここ安達太良周辺には初心者向けの沢があるのが魅力だ。塩沢スキー場の所で仮眠し、翌朝スキー場を横切り、湯川沿いの登山道を進んで僧悟台方面への分岐点から入渓した。暫くはゴーロが続くが目の前に 5 m の滝が出てきたのでここで初めてザイルを使用。5 m 滝上は小滝やナメが続々と現れ飽きがこない。

平らな岩の所で小休止後、更に進むと湯川の核心部三段の滝が出てきた。ザイルを出して一段目は左から登り二段目も左から越して、三段目は左から高巻いた。三段の滝上から小滝を越えるとナメが

きれいな所に飛びだす。左上の岩壁上に人がいて手を振っているので展望台があるみたいだ。更に進むと 8 m 滝が出てくるが、今日は右から高巻いて上部に抜けた。8 m 滝上で二俣となり登山道が横切っているので今日はここで遡行を打ち切りとした。思い返すと 2 年前には金沢氏、松原氏を交えた大勢のメンバーでここ湯沢を遡行した記憶が蘇ってきた。両名とも元気一杯で滝登りを楽しみ、水と戯れ充実した楽しい 1 日として記憶に残っています。二俣でソーメンを茹でて昼食とビールで乾杯をして、馬鹿な事を言って騒いだあの日の事がつい先日のような気がしてしまった。

ここから登山道を下り、一路つくば市を目指して 5 時にはつくば市到着。

(木村 記)

片品川 センノ沢～ナメ沢下降

2005. 9.13

パーティ 坂田英希

キッカケはとある本屋の店頭のこと
今思えば、仕事中にサボりで本屋に赴いたときであった。

一冊の本に気をとられた。

「帝釈山脈の沢」

良く考えればこんなマイナーな本をはたして手に取る輩がそこいらにいるとも思えなかつた。

が、坂田は手にした。手にしてしまつた。
1600円。さらりと目を通し書棚に戻した記憶は鮮明に残つていた。

そうして幾年月
様々な要素が重なり合い坂田はそれを手に入れた。

様々な要素。それは本当に様々、しかも話せば永くなる。

なので結論から言うと、それを見て気になつたのが片品川センノ沢。
沢の遡下降が可能でナメを堪能できる
という。はたして真価やいかに。

大清水から一ノ瀬、ここで沢床へと降り立つ
すぐに左から来る支沢がセンノ沢。
すぐさま総距離200mと謳われるナメが現れる。

とわいえ、幅はわずか二間ほどと言うに及ばぬ規模である。

それでもまあ最近は転勤などもあり山に行けぬ日々、いくらかの発散にはなつたか。

記録を紐解き道を読む楽しさはその規模には比例しないという意味で新しい発見はあつた。

残念ながら、その道読みはいささか精度は甘く、覚悟していた轟漕ぎ後も想定の草原へつながることなく登山道へ出てしまつた。

下降は一つ山を越えた谷へと地形考察でアタリをつけたら適当に下る。

こちらのナメ沢は名前の割りにナメはほとんどない。

上流で一箇所、一ノ瀬手前で一箇所、懸垂下降をするが他になんてことはない。
唯一、気になつているのはセンノ沢で声が出るほど大きな魚影を見かけたことである。

「帝釈山脈の沢」

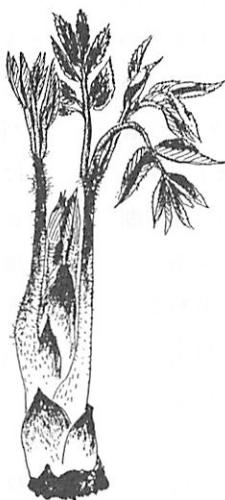
良く考えればこんなマイナーな本をはたして手に取る輩がそこいらにいるとも思えなかつた。

が、見れば見るほど興味深い。

それもそのはず、かの市川学園OB会の
遺産とも言うべき一冊であるらしい。
取り立ててそれがどうしたというわけ
ではないが、坂田にとって空白を埋める

には欠かせない一冊となった。

(坂田 記)



南ア 荒川三山～赤石岳

2005. 9.17～19

パーティ 鈴木大輔

2005年夏も終わりに近づき、街はようやく秋の気配を感じ取れるようになる季節、夏期休暇を利用して南アルプスへ旅立つことにした。人も小屋も多く半ば観光地化しつつある北アルプスよりも、森林に覆われた静かなる山々が、まだ南アルプスにはまだ残されているような気がして、いつしか僕はこの地域を訪れることが多くなっていた。

16日から休みをとっていたため、午後3時ごろ畠薙第一ダムを目指して出発した。ただでさえ長い道のりであるのに、一人での運転となるため、時間に余裕をもってのんびり行くこととした。首都高を超えて、東名に入り、清水インターから安部川沿いの県道を北上し、井川湖を経由して畠薙へ向かう。以前も茶臼～聖を縦走したときに来たことがあるのだが、井川を見るたびに、峠を越えたこんな山奥にこれだけの人が住めるものだと驚いてしまう。山に近いのはいいことだが、住むのであればあちこち行くのにアクセスがよいところが一番良い気がする。井川を越えるころにはすっかり日は暮れていて、時折濃い霧のせいで見通しが悪く神経を使った。道はやがて真っ暗な闇の中にひっそりと眠る畠薙湖とダム施設まで至り、原っぱ同然の駐車

場に停めて、ようやく運転は終わった。シュラフを引っ張りだし、車中泊となつた。このあたりまで来ると、もう気温はだいぶ下つていて暑くはなかつた。

朝起きるとダム上のバス停に車を移す。椹島まで行く東海フォレストのバスは、この時期になると、この辺から出るらしい。人が集まり次第、順次乗せていくとのこと。ダイヤでは始発は9時となっていたが、7時過ぎくらいにバスはやってきて、集まっていた人をザックごとぎゅうぎゅうに詰め込んでバスは発進した。

バスが早く出てくれたおかげで椹島には予定よりも早く着いた。そのため、今日の旅程には余裕ができた。初日は体も慣れていないので、いつもゆっくりと歩きだすことをしている。今日は朝から天気もよく、雲は多いものの歩くにはちょうどいいくらいの暖かさであった。木立の隙間から見える山を見上げながら、千枚小屋へ通じる登山道を行く。樹林帯は空気が澄んでいる気がして、歩いていくと気分がよくなる。

千枚小屋には大体5時間半程度で着いた。さすがに長い道のりとテント泊装備の重さで少々息が切れた。東海フォレストのバス料金3千円は、直営小屋の

素泊まり以上の料金に立て替えられるので、素泊まりにした。このときもらつたレシートを持参すれば、帰りのバスは無料となる。

その日は連休の初日とあって、随分人が泊まるらしい。人が多そうなので、結局テントで寝ることにした。テントなら個室である。他人のいびきに悩まされることもない。千枚小屋から真正面に富士山がよく見える。変わりゆく空の色と雲の形をただぼうっと眺めつつ、本を読んだりしながら時を過ごした。こういう時間が苦にならず、むしろ安堵を覚えるからこそ、単独行をしているのだろうと、ふと思った。

翌朝、18日の行程は長いため、夜明け前に荷物をまとめ、千枚岳の頂上へ向かって歩き出す。小屋の上部からハイマツ帯となり、展望が開けてくる。東の空が赤く染まり、やがて富士山の背後から朝日が顔を出した。それはあまりにも神々しい光景だった。歩くのも止めてしばし見入った。

稜線に出ると風が強く、ひどく寒く感じた。手袋と雨具を着けると多少はましになる。千枚岳から荒川三山に続く登山道は人でいっぱいだった。同じ日程と行程でみんな行くのだろう。東岳を超えて、中岳を通り、道はアップダウンを繰り返す。目の前には目指す赤石岳、振り返れば越えてきた峰々が青空に映えている。3千メートルの縦走路はまさに天にかかる回廊である。空を歩いているような

感覚、僕が縦走の中でもっとも大好きな瞬間だ。荒川小屋への分岐のあるコルでいったん荷物を降ろし、前岳を往復する。日も高く昇り、気温も上がって来て、過ごしやすくなってきた。広大な山腹を走る巻道を行きながら、荒川小屋へたどり着いた。ここまで来ると、けっこう消耗する。というよりだいぶ腹が空いてきた。フリーズドライの牛丼をつくって食べる。水も補給して、あと一息と自分を奮い立たせ赤石岳への登りを開始した。くねくねと続く登りにはあはあと息をつきながら一步一步を踏みしめる。ただ周りの景色の美しさに支えられて、高度を稼いでいく。思考も働かず、ひたすらに足を前へ動かすだけだ。気が付けば傾斜は緩やかになり、僕は日本第7位の高度を持つ頂上に立っていた。

今日は赤石小屋までの行程だ。さらに2時間あまりの下りである。だが、この行程の長さも南アルプスゆえであり、また魅力の一つだ。それだけ長く楽しめると考えればいいのだ。沢沿いに下っていくと、再び道は樹林帯へ入っていく。木の根が道に這い出し、それを飛び越えていくのも疲れた足には酷な作業だ。富士見平で最後の眺望を楽しむ。慰靈碑に手を合わせ、さらに同じような道を下っていくと、木立の合間に赤石小屋が見えた。やれやれとひとまずベンチに腰を下ろし、歩いてきた道を見上げてみる。つらさから逃れ出た喜びと、そのつらさが終わる寂しさと、ない交ぜになったような

気持ちで夜を迎えた。その夜はちょうど中秋の名月にあたり、夜、ふと起きてテントを出てみると、満月が煌々とあたりを照らしている。太陽の反射光に過ぎないはずなのに、どうして月明かりというものはこんなにも魔力を帯びたような輝きを持つのだろうか。

19日下山となり、早朝、赤石尾根を一気に下っていく。少し走るくらいが樂

かもしれないと思い、トレイルランニング気分で駆けた。2時間程度で樅島に到着し、始発の畠縄行バスに乗る。すれ違うバスにはまた多くの登山者が乗っている。連休の谷間になるが、訪れる人も多いようだ。自然の美しさを改めて知った山行となった。

(鈴木 記)

西沢渓谷 胡桃谷

2005. 9.23

パーティ 本団一統、木南真紀子

本団さんのリハビリ山行に連れて行ってもらった西沢渓谷。とてもすばらしいところでした。一般の人でも楽しめる用に整備されていながらも多くの美しい滝が連なり、歩くことを飽きさせませんでした。ところが胡桃谷についてはなんだかあんまり記憶がない。困ったので

ネットで検索しても出てこない。そんなところでした。結局、西沢渓谷の美しさときのこ取りに奔走し、美しい栗たけを収穫してご機嫌で帰ってきました。

(木南 記)

西穂高～槍ヶ岳縦走

2005. 9.18～21

パーティ 渡辺聰子、他 1名

夏休みを祝日につなげてわりと長い休みをとることができたため、3泊4日で西穂～槍の縦走を計画した。

17日の19時頃つくばを出発し本庄・児玉までは下道、そこから松本までは高速を使い午前1時ごろ新穂高温泉駐車場に到着。駐車場はほぼ一杯だったが、微妙なすき間になんとか車を押し込み、テントを張って就寝。

18日 朝7時ごろ起床。天気は上々。準備をしてきて出発。新穂高ロープウェイの乗り場まで約40分。道路を歩くのはちょっとదるい。ロープウェイ乗り場は予想に反して長蛇の列。ロープウェイは、8キロ以上の荷物は荷物券が必要とのことで、荷物の計量をさせられる。・・・18キロ弱。知りたくなかつた・・・。ロープウェイを降り、西穂山荘までの道を歩き出す。荷物は重いが天気も良いのでわりとさくさく進み、1時間とちょっとで到着した。テントを張つたら初日の行程は終了。一休みした後、ピラミッドピークの手前まで歩く。笠ヶ岳や霞沢岳、上高地がよく見えた。本日は中秋の名月。夕方になって急に霧が降りてきはしたが、時折大きな満月が顔を出していた。そのせいもあってかこの日の西穂山荘は無法地帯。隣のテントでは

大騒ぎしているおじさまおばさま、小屋の前のデッキでは、夜遅くまで歌集を手に大声で歌を歌うやはり中高年のおじさまおばさま・・・。おそるべし。そんなこんなにめげずに、なんとか眠りに着く。

19日 4時起床。テントをたたんでいると、急に激しく雨が降り始めた。しばらく様子を見ていると、6時半ぐらいにようやく雨が小降りになってきたので、とりあえず西穂まで行ってみようと出発することにした。独標までは約1時間。雨もほぼやんで快調に進む。独標をこえると、急に道が険しくなるが、1時間強で西穂に到着。人の事は言えないが、この天気にもめげずここまでやってくる人が結構いることには驚いた。どうしようかちょっと迷つたが、先に進むことにした。視界は悪く、次々と現れるピークがようやく見える程度。さすがにこの先是人影がほとんどいない。西穂～奥穂の間はホールドもスタンスも基本的にはガバガバだし、梯子や鎖もぼちりついており、逆層スラブも写真から受ける印象ほど悪くはない。とはいっても油断は禁物、三点支持をしっかりと守り進んでいく。霧が濃く、ジャンダルム、ロバの耳、

馬の背、どれがどれやら全然わからなかつたのがちょっと残念。そんなこんなで奥穂に到着し穂高岳山荘に着いたのが午後三時ごろ。テントをはって一息ついたころにようやく天気が回復し視界がひらける。遅いよ。

20日 やはり四時起床し準備をして出発。しばらくすると、常念岳の方から日が登ってくる。涸沢岳からは槍ヶ岳がみえた。やはり鎖と梯子がついている道を慎重に進んでいると、次第に曇りだし、ガスがかかってきてぱらぱらと雨が降り出してきた。あ～あ。大キレットにさしかかるころには、1時間に1ミリぐらいの感じで普通に降っていた。おまけに風が飛騨側から強く吹いていて体の左側とメガネがびしょびしょ。信州側の斜面に入ると雨風をしげたのだが、ほとんどは飛騨側を歩いていたような気がする。涸沢岳～南岳小屋の間も基本的に梯子と鎖がベタ打ちされており、唯一クライミングっぽかったのは長谷川ピークへの数手のみ。本日も視界がきかず、松涛岩も滝谷もみえずじまいだった。1時半頃に南岳小屋に到着し、中にはいって体を温めさせてもらう。南岳からの道は、これまでとは打って変わって普通の登山道。ピーク一つ越えるだけで、こ

んなにも違うものだろうか。三時頃に槍ヶ岳山荘にようやく到着。疲れたし小屋に泊まろうか、と日和りかけたが小屋の混雑ぶりを見てやはりテントを張ることにした。日が暮れるまで小屋のストーブのそばにいることができたのでいぶん楽だったような気がする。

21日 夜中に目が覚めると昨日までとはうってかわって満天の星。やはり4時に起床し、荷物をまとめていると、空が明るくなってきた。せっかくだから頂上で日の出を見ようと空身で槍の頂上へ向かう。山頂は360度の絶景。昨日まで歩いてきた尾根もよく見える。がんばった、がんばった。しばらくの間、景色を堪能してから下山を開始した。長い長い下り、だんだん足が痛くなってくる。しかし、下りはやっぱり速く、あつという間に山頂が遠くなる。五時間近くで駐車場に到着した。山中はずっと天気が悪く何も見えずじまいだったが最後にすばらしい景色を堪能できたので、まあよしとするか。

(渡辺 記)

秋田役内川 三滝沢～赤湯又沢～

虎毛沢～湯の又沢

2005. 9.28～30

パーティ 坂田英希

「いいねえ。このナメ。このキラメキ。」

前夜、仕事をたたんで一路進路を北にとる。目的地は秋田・虎毛山塊
言うまでもなく、その計画は確信的な安息であったか。

最高の秋晴れに気を良くして輝きを放つ水面をゆっくりと歩く。

役内川、ツブレ沢を遡り左にナメ滝を望む沢が三滝沢である。

出合の滝は少々手強いが、まあなんとか強引に登ってしまえば、あとは気分のよいナメタイム。

時に延々と廊下のように続き、時に滑り台のごとき滝が出現する。

そのとき、この言葉が頭をよぎる。

この三滝沢、ナメはその規模を縮小しつつも源頭付近まで続くのである。

流れはか細くなり水線を勘に任せて右に左に入り込む。なんとルートファインディングはズバリで稜線へ。

今度はこの反対側へ適当にブッシュを掘んで下降を始め、わずかで赤湯又沢左俣の川床に降り立つ。

ここも小規模ながらナメがしばらくは

続く。

右俣と出会い、途端に沢床は赤く染まる。
この先に安息の休日が待っている。

最近覚えた流行歌のサビの部分を繰り返しハミングしてしまう程、期待は高まる。

ふと行く先に煙が見える。

「見えた！」

そこそこが赤湯又沢の地熱地帯であった。

安息の幕場にて。

地熱を噴する河原には白濁の出湯が丁度いい湯加減で待っている。

幕の準備ができたらあとは温泉。

緑川の吟釀と肴をもって湯に浸かりながら酒をいただく。

暗くなる前から酔っ払いの出来上がり。湯に浸かり、酒を飲み、時に昼寝。暗くなるまでにひとしきり気分良くすごす。今日は焚き火をしないつもりだったけど、夜はやはり息が白くなるほどに冷える。

控えめな薪でとろとろと、星空を眺めながらうとうとと、断片的な夢にハッとする場面も。

本日の天気は”つり時々ナメ”でしょう。
それでは皆さん、さようなら。
赤湯又沢を下降し虎毛沢に入る。
赤湯又沢は温泉混じりで”濁り”が玉に
瑕だが虎毛沢のキラメキには息吹があ
る。
は。は。は。突き抜けた空、あとは独り
日がなにつりとナメ。
気分はもはや、秋風のごとき。おもいの
ままに歩き出す。
大漁かい？まあまあだね。

不可思議な縞模様は虎毛か亀甲か。とも
かくしばらく魅入る紋様にヒラメく。
虎毛沢の見所の一つにいわゆる「亀甲模
様」と言うのがある。
開けたナメに走り書きされたかのよう
な紋様。きれいな亀甲もあれば幾何学的
であったり毛筆書体の模様もあったり
する。
紛れもない天然の岩の紋様なんだけど
とてもそうは思えない。
「それを観て、はじめはとてもびっくり
したさ。自然の不思議？モチロンそれは
そうなんだけね。
でもボクはこう考えたんだ。『トロルは
ホントに居たんだ！』ってね。」

闇夜に小さな焚火の明かりは幕場を照
らし煙は夜空へと消えていく。見上げる
空には”山の星空”が広がる。
パチパチと時に火の粉が立ち昇り、小さ
なとろ火は自然のリズムで強くそして

弱くを繰り返す。
そんなさまを暗闇の出湯に浸かり、ほろ
酔い気分で眺めていると今までで最高
の夜に思えてならない。
「おうい、夜空をいく飛行機よ。おまえ
は一体この世界のどこへ行くというの
だ？」
「おまえに今の俺が見えるかい？俺には
おまえがよ～く見えるぞお。」
今宵も吟醸、肴は焼きあがりをひと串。
一飯一肴一汁、そして一献。極上の一膳
は今宵を彩るにふさわしい。

最終日は赤湯又右又を詰めるはずが支
沢に入ってしまい思わぬヤブを漕ぐ事
になってしまったがドンマイ。
稜線を跨いで今度は湯の又沢へと降り
立つ。
これはこれは。どうもどうも。旅も終わ
りのこの切なさにコレデモカといば
かりのナメナメナメ・・・。
「さて、今までに”ナメ”と何回言った
でしょう？」と言い出したくなるほどの
ダメ押しで秀麗なナメが展開される。

ほろほろと余計なものは落っこちて今
ではスッカリ誰でもなくなった。
空はずいぶん高くってどうにかすれば
届くのかもしれないけど、足元にきらめ
く水の息吹があるから、それでイイんだ
とおもう。
そうして誰でもないボクは今、気持ちい
い風を胸いっぱいに。（坂田 記）

錫杖岳 左方カンテ

2005.10.8～10

パーティ 本図一統、渡辺聰子

1日目入山、2日目登攀、3日目下山。という条件で本図さんに錫杖にご一緒していただくことになった。天気予報は雨のち曇、晴れ、晴れ。開通したばかりの伊勢崎I.C.から高速に乗り、後はいつもの道路で新穂高温泉まで向かう。安房トンネルを越えた辺りから雨が降りだしたがまあ想定内。1日目は入山のみなのでと4時頃就寝。

10月8日 目を覚ますと案の定雨だが、ちょっと降りが強くはないか？雨がやんだら出発しようと準備を整え雨がやむのを待つ。だが、お昼を回り、1時を過ぎ、2時をこえ3時になっても一向にやむ気配がない。・・・停滞決定。5時から飲み出し、早々に寝る。

10月9日 3時起床。雨はわずかに残っているが4時にヘッドランプをつけて出発する。ヘッドランプの明かりが霧に反射してしまうので視界が乏しくとても歩きにくい。登山道、それも通つたことのある所なのにかなり消耗した。うっすらと明るくなってきたころちょうど渡渉点につき、流れに足を突っ込んで渡る。増水が激しく、前日だったらとても渡れなかっただろう。さらに小一時間ほど歩き、6時に錫杖沢出合に到着。雨はあがっていたものの、天気は思ったよ

り好転してくれない。山には濃いガスがかかったままで、時折対岸の沢が見えなくなる位のところまで降りてくる。様子を見るが一向に回復せず、時折小雨も降ってきた。だめだこりやということで停滞決定、敗退色が強くなってくる。できることもないので薪を集めて盛大に焚き火をした後7時頃就寝。

10月10日 1時頃外にでた本図さんが満天の星だと教えてくれる。このまま晴れたら登ろうと話を決めて再度眠りにつく。その後、本図さんは眠気がどこかへ行ってしまったのか

本図さん：「渡辺よ、そろそろ起きよう。」
渡辺：「何時ですか？」

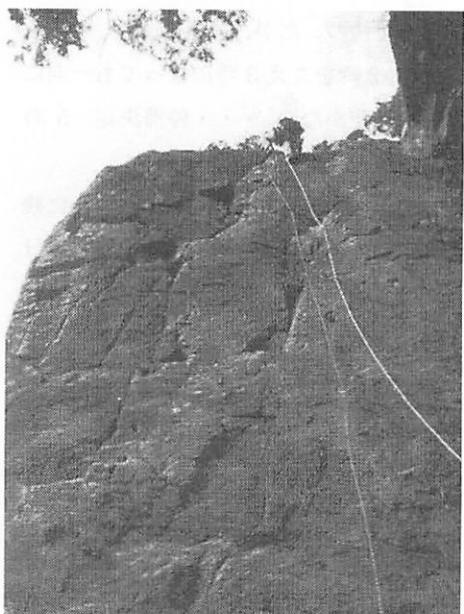
本図さん：「今、○時。」

渡辺：「・・・起きません。」 zzz・・・
というやりとりを何度も繰り返し、4時になってようやく起きることにした。薄雲がかかってはいたが天気は良さそうである。5時半にテント場を出発。前日とはうってかわり今日は前衛壁がはつきりと見える。登り約1時間で取付きに到着、壁は湿り気もあるが思った以上に乾いているという印象だった。登攀準備をしながら妙に緊張している自分に気付く。よく考えてみると本チャンはすごく久しぶりだ、急にびびってくるが深呼

吸してから取付く。1P:濡れてたらやだなどの思いから凹角の脇の岩稜を登り立木でビレイ。2P-1:本図さんがちょっと登り、先を行こうとしたが「やっぱいいや。」と途中できる。2P-2:それじゃ、と先を行かせてもらいテラスに登る。3P:第一の核心。テラス正面から回り込み高度感たっぷりのフェイスを登る。ガバの1手は見つかれど、そこへの1歩がすぐには発見できず。A0で行く人も多いようだが、先は長いしここで力を使いたくないとあぶみを出す。・・・くう。4P:トラバース気味に数m進みチムニーに入る。狭い狭いと話には聞いていたが出だしがホントに狭い。うー、ザックがひっかかる。ホールド、スタンスは問題なく、チムニーを抜けたところでビレイ。5P:垂直のフェイス。ランナー豊富でジムっぽいと思いつつも恐怖心が襲ってくる。上部は簡単なブッシュ混じりのリッジ。6P:大テラスまでの数m。7P:ルートの核心部。出だしの数手が決めてというが、中盤も終盤も結構なものである。出だしはフリーで越えられたらとチャレンジしてみると、全然歯が立ちそうもなくあぶみ多用で登る。終盤のリッジからスラブへの乗っ越しに勇気がいる。長いピッチで集中力がきれそうになるが、なんとかビレイ点に到着。8P-1:なぜかのピッチだけ濡れている。しかもほとんどピンがない。力を加えたら剥がれそうなフレークをごまかしながら登る。フレーク

が一段落したところで一度ピッチを切らせてもらう8P-2:やはりランナーが乏しく濡れてすべりそうなところを登り、ようやく終了点っぽいところに到着する。しかしあまだ先があるということさらに1ピッチのぼし、見通しのよい広場にてて本当の終了点についた。正面に西穂が見てなかなかよい気分である。一休みしてから同ルートの懸垂下降ですんなり取付きまで戻り、無事下山した。

左方カンテは思った以上に岩がしっかりしており、非常に快適でもう一度登ってもよいと思うようなルートであった。もし、次に登る機会があったらその時はフリーで登れたらよいな、と思う今日この頃である。



5ピッチ目:垂直のフェイス

(渡辺 記)

難台山でクライミング

2005. 10.23

パーティ 本図一統、渡辺聰子、木南真紀子、吉田仁、他 1 名

難台山は、土浦、つくばをベースにする私達には一番近いエリアでしょう。だいぶ前に娘と愛宕山から吾国山をハイクしたときがありました。その時に獅子岩付近を通りかかった時に登っている人を見かけてこんなとこを開拓した人がいるんだと思ったのを覚えています。改めて今回開拓者の好意もあり現場を案内していただける機会に恵まれました。そこは想像していたよりルート数も多いしエリア的にも点在型とはいえ述べにすると結構な面積になると思いま

す。ここを少人数でこつこつと開拓して行った人たちには敬意を払わなければならないでしょう。ルートの質としてはこれが奥多摩、秩父辺りにあったとしたらクライマーが大挙して押し寄せると言うようなことは無いかもしれません。我々茨城県民としては貴重なエリアだということは間違いないと思うので、機会があれば利用させていただきたいと思います。

(吉田 記)



富士山

2005. 12.3~4

パーティ 松田 尚、他 1名

寡雪と言われていた12月初旬の富士山。

今年は佐藤小屋が閉まっていたため、多くのパーティーが水(雪)を求めて止む無く、8合めあたりにテントを上げていた。

(7合付近はほとんど雪無しで雪訓にはならなかつたようだ。)

テントをこのよろまで上げられるほど、突風の無い特異な気象条件でした。

(完全に冬型が崩れ、南岸低気圧が近づきつつあつた。)

夜から天気が崩れ、富士吉田方面は夜から降雪。

4日の日曜は朝からどんよりと曇り。風のない条件下で、小雪がちらつくなか、約3時間で稜線。

下山時も雪は降り続いた。

佐藤小屋から新五合までの林道で吉田大沢を横切るところで富士山降ろしの烈風が絶え間なく吹き降ろし、ガードレー

ルのワイヤーが途切れた地点で風が止むまで15分ほど風に吹かれた。五合目でも生命の危険を感じた。冬富士の危険を実感させられた。

スバルラインは約10cmの降雪で、チーンを巻いて下った。

3日 スバルライン新5合先の林道上

10:30、11:20佐藤小屋、15:30八合目C.S.

4日 C.S. 7:45、10:30お鉢、11:45 八合目C.S.(撤収)、14:30佐藤小屋、15:30林道(車)

(松田 記)

那須 朝日岳

2005. 12.13

パーティ 坂田英希

困った。実に困った。

アイゼントレーニングのはずが、アイゼンを履くことすらなく雪に戯れ撤退となつたためである。

こうやって記録を書く段になって、書く事が無くて困った。

コトの起りはシーズン前にアイゼンを履いておきたかった事に他ならない。

那須は同じ季節に二度行ったことがあった。峰の茶屋での暴風は思い出の片隅にあった。

本来ならば、峰の茶屋手前を谷に下りて朝日岳南稜を行くつもりであった。

そもそもこのルートは本図さんに「アイゼントレーニングに独りでいけそなとこ」として推奨を受けていた。

しかし、この冬最初の寒気到来、そして冬型。いやな予感はしていた。

大丸の駐車場を出発しすでにトレースの埋まつた登山道を脛ラッセルで進む。

高度を上げるたびにそれは膝となり腿となり腰となった。しかも風は強くなるばかり。

とてもじゃないが、南稜に取り付くために谷に下りれば体は埋まるであろう。

なおさらこの強風で簡単とはいえ稜を行くには危険が多い。

それじゃあ、登山道で茶臼や朝日？ いまさらながら魅力に欠ける。

結果、峠の茶屋にて撤退。夏ならここが登山口って所である。

時間はすでに二時間経っていた。

よもやの雪量にアイゼンどころかラッセル訓練とでも言うべきか。

しかし、今不足している課題が見えてきたのはまあ、収穫といつていい。

そんなことを帰りすがらにぼんやりと思った。

「また、来ることになるのかなあ」そんな予感は、おおかた確信に満ちている。

(坂田 記)

《友好山岳団体の月報・会報・その他》

ありがとうございました

.....月報.....

◎ろうまん山房通信 NO.21 2005.9 B5 P Rohmán Sanbow

猪ヶ森山事故報告、川内・仙見川静川ほか

◎ろうまん山房通信 NO.23 2005.11 B5 P Rohman Sanbow

東北ふらりぶらり旅、焼石・きのこ山行、黒部・下の廊下、川内・鍋倉山、朝日・
栂形山ほか

◎ろうまん山房通信 NO.24 2005.12 B5 P Rohman Sanbow

上州・子持山、山房祭、只見真奈川、忘年会ほか

◎まほろば NO.19 2005.9 B5 22P まほろば山岳会

奥利根・ナルミズ沢、楨俣川日崎沢左俣～猫又川右俣右沢～外田代～右俣左沢～猫
又川ワル沢～ススキ峰～水長沢文神沢中俣～南田代～楨又川本流、利根川本流～大
水上山～十字峠、下田・大谷川・鎌倉沢ほか

◎まほろば NO.20 2005.10 B5 26P まほろば山岳会

会越・田子倉～浅草岳～叶津、越後・三国川仙ノ滝沢、南会津・桧枝岐川下ノ沢～
会津駒ヶ岳～中門岳、黒谷川稻子沢コイド沢～下梯子沢～スギソネ沢出合、只見川
小戸沢西の沢そそろ沢支流～1228m～東の沢ほか

◎まほろば NO.21 2005.11 B5 24P まほろば山岳会

2005年秋の集中・南会津丸山岳・大幽沢西ノ沢、袖沢北沢、袖沢メルガ股沢、
帝駒・片品川根羽沢湯沢右俣～物見山～西尾根、南会津・湯ノ岐川鼓勇沢～大沢高
森山～二字府沢ほか

◎まほろば NO.22 2005.12 B5 26P まほろば山岳会

上州武尊・四釜川、尾瀬・富士見峠、奥秩父・入川赤沢谷、日光・志津峠～男体山、
足尾・皇海山、奥秩父・滝川慎ノ沢八百谷～金山沢ほか

◎わらじ NO.595 2005.10 B5 20P わらじの仲間

秋の集中・朝日・金目川中俣、金目川左俣～祝瓶山、四万川本谷～湯ノ沢、長笹沢
ガラン沢、越後・蛇子沢左俣、下津川本谷、ヨセミテほか

◎わらじ NO.596 2005.11 B5 16P わらじの仲間

越後・十字峠～中尾ツルネ～小穂口の頭、三国川銅倉沢上シンデン沢、スズメバチ
による事故報告、虎毛・湯ノ又温泉～役内川三滝沢～虎毛山～役内川ツブレ沢～湯
ノ又温泉、南会津・黒谷川西実入～大幽東ノ沢ほか

- ◎わらじ NO.597 2005.12 B5 16P わらじの仲間
奥多摩・南秋川小坂志川、足尾日光・袈裟丸山～皇海山～宿堂坊山～白根山、上州・表妙義縦走、城ヶ崎事故報告ほか
- ◎わらじ NO.598 2006.1 B5 28P わらじの仲間
朝日・大井沢～竜ヶ岳～1225mピーク、ネパールトレッキング・ゴーキョピーク＆カラパタールほか
- ◎さわぐるみ NO.32 2005.10 A4 36P グループ沢胡桃
谷川・西ゼン、檜又谷二ノ沢、二口・二口沢小松倉沢～南沢、越後・米子沢～奈良沢川ゴトウジ沢～ブサノ裏沢、水無川滝沢左俣、谷川・湯檜曽川高倉沢右俣、平ヶ岳・平ヶ岳沢先ノ沢～恋ノ岐川、巻倉沢、平ヶ岳沢～池ノ沢、吾妻・前川大滝沢ホラ貝沢、丹沢・玄倉川弥七沢中俣沢～左俣、朝日・荒川女川藤沢川ほか
- ◎さわぐるみ NO.33 2005.11 A4 25P グループ沢胡桃
谷川・ヒツゴ一沢、湯檜曽川ゼニイレ沢、南ア・尾白川黄連谷右俣、焼石・尿前本沢右俣～左俣、夏油川ウシロ沢、会越・叶津川餅井戸沢、越後・大源太川クロガネ沢右俣～左俣、奥秩父・大洞川荒沢谷ほか
- ◎さわぐるみ NO.34 2005.12 A4 20P グループ沢胡桃
上信越・白砂川大沢川、丹沢・神ノ川エビラ沢、世附川樅ノ木沢～水ノ木沢、早戸川円山木沢～本間沢、大山川～春岳沢、奥武蔵・東吾野岩場ほか
- ◎Next! NO.117 2005.10 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん
下田・思い出の光来出ほか
- ◎Next! NO.118 2005.10 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
東北・胆沢川小出川、南会津・塩ノ岐川本流ほか
- ◎Next! NO.119 2005.11 B5 10P 山岳渓流釣り集団むげん
浅草岳ほか
- ◎Next! NO.120 2005.12 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎とまのかぜ NO.155 2005.10 B5 76P 童人トマの風
谷川万太郎谷集中・本谷、三ノ滝沢一ノ沢、デトノタキ沢、イシクラ沢、オコマタケノ沢左俣、井戸小屋沢本谷、井戸小屋沢右俣、大ベタテ沢右俣、木曾・木曾川柿其川本流、御嶽・鈴ヶ沢東股～中股、毛猛・黒又川水頭沢、会越・風来沢川河原井戸沢～風来沢、奥多摩・峰谷川雨降川、下田・五十嵐川ヒグラ沢、川内・杉川アカシガラ沢～赤倉沢、南ア・尾白川黄蓮谷右俣、越後・水無川笹花沢、上信越・魚野

川本流、南会津・楨戸沢～会津朝日岳北壁スラブ、佐渡・白瀬川中俣～小野見川右俣～左俣、会越・室谷川本流～叶津川五枚沢～只見、戸隠・裾花川本谷、越後・佐梨川道行沢、出羽三山・葉山・赤松沢、越後・蛇子沢左俣、北海道・日高ヌビナイ川、知床モセカルベツ川～イダシュベツ川、礼文・起登白川～アマナ川ほか

◎とまのかぜ N0.156 2005.11 B5 10P 童人トマの風

北ア・唐沢追悼山行、奥秩父・東沢釜ノ沢西俣～東俣ほか

◎とまのかぜ N0.157 2005.12 B5 20P 童人トマの風

天覧山・遭対訓練、中ア・越百山～南駒ヶ岳～空木岳、奥秩父・国師ヶ岳～甲武信ヶ岳、大菩薩・滝子山ほか

◎とまのかぜ N0.158 2006.1 B5 29P 童人トマの風

雪上訓練・八海山、富士山、谷川岳、蓼科、湯藏山～高倉山、丹沢・塔ノ岳、南ア・尾白川冰瀑、八ヶ岳・真教寺尾根～赤岳～硫黄岳、天狗岳、上州武尊山ほか

◎すずらん通信 N0.295 2005.10 B5 8P 鈴蘭山の会

皆瀬川春川本谷、南ア・尾白川黄蓮谷右俣、奥秩父・和名倉沢ほか

◎すずらん通信 N0.296 2005.11 B5 8P 鈴蘭山の会

会津・紅葉ハイク、吾妻・大滝沢、関西・大峰山弥山コース、八経ヶ岳ほか

◎すずらん通信 N0.297 2005.12 B5 2P 鈴蘭山の会

野沢スキーほか

◎すずらん通信 N0.298 2006.1 B5 8P 鈴蘭山の会

八甲田・酸ヶ湯温泉ツアー、小日向山ほか

◎逍遙 N0.3 2005.9 B5 P 逍遙溪稜会

集中山行・大蛇尾川東俣、西俣、山梨・鶴川・大久保沢、日光・東大芦川、那須・阿武隈川・一里滝沢、丹沢・中川川箱根屋沢、奥秩父・豆焼沢、足尾・庚申川～松木川、丹沢・モチコシ沢、奥多摩・長久保沢、松木川・小足沢～三右衛門沢、奥秩父・野栗沢赤岩沢悪谷、飯豊・大石川、奥多摩・後山川青岩谷、東北・生保内川～上天狗沢～下天狗沢～朝日沢～堀内沢、出谷川中俣沢、正沢川細尾沢、奥多摩・小川谷滝谷、丹沢・玄倉川同角沢事故報告ほか

..... 会報

◎ADVENTURE forum N0.19 2005.12 A4 8P 植村記念財団

日本初のエベレスト登頂を語る、ほか

◎とまのかぜ N0.12 2005.11 287P 童人トマの風

ミニ特集・禿・須金山塊として14ルート。無雪期の山・会山行・黒谷川周辺8ルート、朝日天狗角力山3本、猪ヶ森山6本。朝日飯豊・5本。川内下田会越・4本。

南会津・1本。越後・7本。谷川奥利根・7本。北海道・5本。東北・5本。北ア
頸城中ア・3本。南アハケ岳・3本。奥秩父・1本。関東周辺・4本。関西以西・
3本。離島海外・3本。雪の山として・飯豊・1本。南会津・1本。越後・11本。
谷川・4本。北海道東北・4本。北ア・4本。頸城・2本。中ア・1本。南アハケ
岳・6本。上州・4本。などのルートの記録ほか

◎年報わらじ NO.28 2005.12 A5 275P わらじの仲間

2004年冬合宿・越後北ノ又流域・5本。2004年冬の集中・飯豊焼峰山・4本。2004
年春の集中・会越日尊ノ倉山・5本。2004年夏合宿・飯豊の沢・4本。2004年秋の
集中・飯豊頼母木山・5本。訓練山行・3本。無雪期の記録・40本。新雪期・3
本。厳冬期・8本。残雪期・6本。山スキー・8本。海外・1本ほか

◎山水 NO.31 2005.8 2005.8 B5 45P 常北山水会山岳部

春山合宿・穂高岳など15本の山行記録。会員名簿ほか

◎あをい NO.48 2005.11 A4 102P 水戸葵山岳会

第一部・クライミングボード建設。記念山行・ヨーロッパなど5本の山行。第二部・
合宿15年度・春夏冬4本。16年度・4本。第三部・個人山行・15年度・10
本。16年度・9本。第四部・その他の記録10本。15年度16年度山行一覧は
か

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

これまで編集を担当してくれていたKさんが茨城から500キロほど北上した地へ転勤となつたため、後を引き継ぐことになりました。「やります。」と返事してから数ヶ月、ふと気付くとたまたま原稿は1年分。年報にしては?との提案をすげなく却下され、いろいろな手違いもあったため58、59号が56、57号より先に発行という事態になつてしましました。生来のめんどくさがりに慣れない作業が重なつて編集作業が大幅に遅れましたこと、この場でお詫び致します。軽く引き受けはみたものの、初めての編集作業を終えてみて思ったことは「思った以上に大変だ」という事でしょうか、やはり物事を一つまとめるというのは簡単にはいかないもので、仕事においても遊びにおいてもやるならきちんとやらねばと改めて思った次第です。と言いつつもきちんとした会報にとはほど遠い号となつてしましました。すでに「誰か次の人に・・・」とのどまで声が出かかるておりますがもうしばらく頑張ってみようと思っておりますのでどうぞよろしくお願ひ致します。

56、57号は現在編集作業を行つてゐるところですのでもう少々おまちください。

(S子)

季報〔R&V〕第58、59号 発行 2006年夏

発行人：本図一統

発行所：ACCJ-茨城

編集者：本図一統、渡辺聰子

印刷所：やまと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団